携しながら重要な役割を果たす様子がうかがえるが、そこでも両者は区別され、与力が上、町年寄が下に位置づけられている。本書では、この点が曖昧なために、論旨に少々わかりづらいところがあった。町奉行―与力―町年寄―町役人という主体間の序列を意識しつつ、与力と町年寄がそれぞれどのような位置や役割をもち、両者がどのような関係を取り結んだのかを追究することで、都市法の重層性や柔軟性がいつそうクリアになり、さらに説得力が増すと思われた。

以上、本書の概要と成果、疑問点を述べてきた。評者の不勉強によりの外れなところも多々あるものと恐れるが、著者と読者のご寛恕をたまわりたい。本書は、良質な一次史料を丹念に分析することで、近世中後期の江戸における都市法の構造と特質を具体的かつ総合的に解明するとともに、近世の法や政策のあり方、権力と社会の関係などについて優れた知見をいくつも導き出している。内容面だけでなく運用面にも注目しつつ、広い視野から都市法をとらえる視角や方法は卓越しており、『御触書集成』等に収録されない多様な法の存在と機能を論じた本書は、今後、都市法のみならず、日本近世の法や都市に関する研究の全般にわたって参照されるべき貴重な業績である。

(小倉 宗)

高澤紀恵ほか著「交差する日本近世史——日仏の対話から」(『思想』一〇八四、岩波書店)

一 本論文集は、直接的には二〇一三年一月二二・二三日にパリ第四大学(ソルボンヌ)において開催された「日本近世の社会と身分」と題するセミナーが出发点となる研究成果とのことであるが、少なくとも近年相次いで公開された高澤紀恵他編『別冊都市史研究 パリと江戸 伝統都市の比較史¹⁾』、『年報都市史研究 一八 都市の比較史²⁾』、高澤紀恵・吉田伸之他編『別冊都市史研究 伝統都市を比較する 飯田とシャルルヴィル³⁾』等から連なる一連の成果の集大成、もしくはそれらの延長線上にある成果としての性格を有しているものと思われる。

都市の比較史的考察の重要性はつとに指摘されているところであるが、とりわけ本企画は、近年の日本近世史の進展ぶりを特徴的に示していると思われる身分的周縁に関する研究自体はもとより、それらの研究がフランスの研究者によって具体的にどのようなように捉えられているのかを窺い知ることができる点で大変興味深く、なおかつ重厚な内容となっている。

二 最初に本論文集の内容を紹介することにしたいが、全体の構成は、次の通りである(後の説明の便宜上、一部に番号を付した)。

①思想の言葉

高澤紀恵

②歴史の比較・アプローチの交差・概念の再検討

—身分的周縁／交差する近世身分制論—

ギヨーム・カレ

③髪結の職分と所有

吉田伸之

④近世大坂の身分的周縁

塚田 孝

⑤「簾」

—周縁化された芸能者と地域社会—

吉田ゆり子

⑥城下町萩の武家奉公人

森下 徹

⑦周縁と身分の社会史

—若干の考察—

エリ・アダッド

⑧身分概念と新しい社会史

—アンシアン・レژیム期のフランスと江戸時代の日

本— フランソワ・ジョゼフ・ルッジウ

応 答—日本より

身分的周縁論に寄り添う

吉田伸之

日仏の比較都市史の研究交流に参加して

塚田 孝

「簾」からみる地域社会

吉田ゆり子

武家奉公人から考える身分社会論

森下 徹

以下、各々の論文の概要を紹介することにしたが、日本の四名の研究者の論文に関してはいずれも実証性に富んだ詳細な論考であるが、その主要内容についてはこれまでに報告されている部分も多く、またすでに一定の評価がなされていると思われるため紙幅の都合上やや簡潔に行うこととし、フランスの三名の論文により多くの紙幅を割くこととした。

さらに、フランスの研究者の論文に対する日本の研究者による「応答」の部分についての紹介はここでは割愛し、後述する評者のコメントの部分において適宜言及させていただくことを予めお断りしておきたい。

①高澤紀恵論文

本論文集達成の経緯とフランスの三名の研究者の経歴が簡単に述べられた後、日本の日本史家、フランスのフランス史家、フランスの日本史家、日本のフランス史家が「交差」することによって浮かび上がってきた問題点を三点指摘している。すなわち、それは、第一に身分論の射程、第二に史料論に関わる問題、第三に史学史の理解に関わる問題、である。それぞれが、いずれも含蓄のある意義深い指摘であると言える。

そして、それらの「交差と比較」の前提として、翻訳の重要性とその難しさについて改めて言及されており、本論文を閉じている。

②ギヨーム・カレ論文（訳 高澤紀恵・松本礼子）

最初に、アナール学派と日本の近世史の近年の論点を整理し、フランスと日本の「新しい歴史学」は同時並行的に、しかし相互に独立性を持って生まれたとしている。そして、それぞれの視点を突き合わせることは、視点を多様化させる点で有意義であると言明している。さらに、上記の点を前提として、近世日本の周縁から身分社会を再考するという今回企画された諸研究について、日用、振売、借屋人、乞食のよう

な近世社会において数の上でも無視したい存在に着目することにより、いわゆる従前からある「華やかな江戸」のイメージと格闘することが可能になったと結論づけている。

また、その方法論としては、日常的関係、制度的構築物、権力行使の三者の接統関係を研究するという手法を高く評価しており、フランスの研究者へ与えたそのインパクトの大きさを再度強調している。

③吉田伸之論文

安永九年九月の「惣仲間定法享」や宝永七年十一月の「三組古大帳」等の内容を詳細に分析することを通じて、髪結（仲間）の存在形態を具体的に明らかにしている。

そこから導き出された結論は、①髪結という職分を担う者は固有の身分として権力によって公認された証左は見出せないこと、②髪結における共同組織は株主と下職に分化し、前者のみが公的に髪結仲間として認知されたという点であり、そのため、髪結の技量は職人的な技術労働からはいわば「周縁」にあったものと位置づけている。

④塚田孝論文

近世都市・大坂をその考察の対象とし、勧進に関わる存在と集団のあり方を考察した論稿である。

具体的な事例を数多く挙げながら主張しているその結論は、非人と勧進宗教者との間には一線が画されていたものの、その一方で勧進宗教者が（大坂）町奉行から組織と勧進権を公認されるためには、御用（役）を果たすことにより彼らが社

会的に有用であることを示す必要があったとし、両者の共通性についても言及している点であると思われる。

⑤吉田ゆり子論文

中世の声聞師の系譜を引く芸能者である「簪」について、地域社会である信濃国下伊奈地域を考察の対象としてその組織と編制のされ方を考察した論稿である。

詳細な分析の結果、「簪」の村役は、村の巡回警備、治安維持、死者の埋葬、火事の際の駆けつけ、野荒しの警備等であったとされる。また「ケガレ」意識を内包する「えた」に対する差別とは質の違う関係が村民との間にあり、両者の婚姻は存在しないものと認識されていたと主張されている。

そして、「簪」は公式な身分呼称としては定められていなかったものの、「百姓」「えた」「非人」とは異なる身分、すなわち「身分的周縁」として把握されており、その背景には近世の支配原理とは異なる「本所」の存在があったものと説いている。

⑥森下徹論文

城下町・萩の武家奉公人（日用）の存在形態を分析した論稿である。

家臣に雇用された奉公人と、藩の家臣団の一員として抱え込まれた奉公人の双方の実態を丁寧な分析・考察した結果、彼らはいわゆる身分社会とは異質の存在であったものの、役編成や支配機構を前提にそれに寄り添う形で独自に集団化を遂げたものとして理解できると概括的にまとめている。

⑦エリ・アダッド論文（訳 高澤紀恵・松本礼子・竹下和亮）

日本とフランスの過去の社会では、個人のレベルでも集団のレベルでもある身分に帰属するとは、特権の保有と結びついた役割の遂行、目に見える印、社会的言語という不可分の三要素によって刻印されていたという説得力に富んだ理解の下、ヨーロッパ社会における実例を挙げつつ、前掲の③より⑥の論文に対して論評を加えている。

そのなかでもとりわけ注目すべき言説は、「周縁」という概念にこだわる日本の近年の研究は、近世フランスの専門家に對しても大きな寄与となるであろうとし、改めて周縁や社会の下部を見なくてはならないという自戒を込めた認識と、その一方で身分概念を曖昧にする危険性をはらんでいるという指摘であるように思われた。

⑧フランソワ・ジョゼフ・ルジウ論文（訳 竹下和亮）

編集部による本企画の前提である身分の三つの次元として、法、固有の意味での社会、認識論、と整理した上で、前掲の③より⑥の論文に對しての有益なコメントを披瀝している。

そして、本稿は、フランスの実態とのいっそうの対比という点に力点を置きつつ議論が展開されている印象を強く受けた。なかでもその際目を引いたのは、法的身分は西洋ではその基準をはっきりと定義することは難しいという点と、それに對して近年の日本研究における家系図への注目という傾向は、フランス研究にとっても有益な方法となるであろうとの示唆

であった。

三 以上のように、本論文集は多彩な内容から成っており、当然評価すべき点も数多く存在しているが、評者としては、差し当たり次の三点を特に積極的に捉えるべきものとして述べておきたい。

第一は、③より⑥の論文は、もはや言うまでもないことかも知れないが、いずれも長い間の研究蓄積の結果もたらされた成果であり、実証性に富んだ安定感十分な論稿であるという点である。ここ二十年ほどの間において展開された日本の近世史研究における身分的周縁に関する追究の進展ぶりを顕著に示していると言つてよいであろう。

第二は、②、⑦、⑧の論文は、史学史の理解という点を意識しながら行われている様々な指摘を通じて、現在の日本における近世史研究の到達点の高さを改めて認識することができたという点である。また、このことは今後の近世史研究、とりわけ都市史研究の志向すべき方向性についても有益な示唆となっていると思われる。

第三は、本論文集の完成に至るまで実に長い時間をかけて企画された方々、また翻訳の労をとって下さった多くの方のご苦労に對して率直に頭の下がる思いがしたという点である。四 前述のような積極的な評価を前提として、続いて本論文集に對する若干の疑問点や評者としてさらに要望する点について述べておくことにしたい。

第一点は、先行研究を研究史の流れという点から明確に位

置づけてはしかったという点である。本企画は極めて斬新な内容に満ちているものであるが、周知のようにかつて類似の成果が生み出されていることもまた事実である。⁽⁴⁾ 本企画推進の中心的役割を担っていると思われる吉田伸之氏もそのようなことは十分に承知しておられ、かつてそのような研究に対して厳しい論評を加えている。⁽⁵⁾ しかし、本企画のなかでは史学史の理解に関する重要性が改めて説かれており、また「下から」の視点が重要であるという指摘もかつて同様になされていることを鑑みる時（ただし、その意味するところは必ずしも一致しないように思われるが）、先行研究について本企画の前提とすべき点と乗り越えるべき点とを截然と分けて、それぞれについて最初に具体的に言及すべきだったのではなからうか。

また、評者としては、かつての企画においても翻訳の労をとって下さった高澤紀恵氏⁽⁹⁾にもフランスの都市に関する研究に対して同様の措置を講じていただけたならばいさう有難かったと感じている。

第二点は、近世の身分制の理解に関する点である。本論文集における日本の研究者の身分の理解に対して、フランスの研究者から若干の異議があったことが窺える。⁽¹⁰⁾ 周知のように、現在のところ日本近世史の研究者の間では必ずしも近世の「身分」について統一的理解が得られるまでその研究は到達していないと把握するのが穏当なのではなからうか。⁽¹¹⁾ したがって、実際にはなかなか難しい課題であろうが、本企画にお

ける日本の四名の研究者の持論以外の見解も含み込んだかたちで近世の身分制について紹介した方が、フランスの研究者にとってはより理解しやすかったのではなからうかと率直に言って感じたものである。

第三点は、史料論に関わることである。フランスの研究者から、本論文集の日本の研究者が依拠する史料の多くが権力側の規定や決定であるとの批判が一部なされている。⁽¹²⁾ この点に関しては、たとえば、吉田伸之氏が引用している「三組古大帳」⁽¹³⁾は仲間の法であり、塚田孝氏からは垣外仲間仲間独自の法を有していたとの反論がただちになされるであろうことが容易に推測される。

しかし、この点については、評者はむしろ逆に、それでは両氏が依拠する仲間の法の内容自体やその成立過程、さらにはその運用の局面において、権力者側からの法やその指示の影響は全く存在していなかったのかという疑問をあえて呈しておきたい。この問題については、いさう広い視野からの丁寧な史料批判が必要なのではあるまいか。

五 最後に、本論文集の特に日本の四名の研究者による成果は、日本近世法制史の分野でも取り入れなければならなかったり、あるいはその前提として位置づけるべき内容を多く含んでいるように思われることを指摘しておきたい。たとえば、少し考えただけでも、塚田孝、吉田ゆり子の両氏が明らかにした事実は、近世の裁判手続きの過程やその体系上改めて明確に位置づける必要があるであろう。また、森下徹氏の

明らかにした実態は、かつて盛んに行われた近世の雇傭法制をめぐる研究との関わり方が一段と問われるように感じられた。その意味において、本論文集の成果は、法制史研究に対しても多くの課題を提供していることは言うまでもないのである。

本来、本書評の筆をとるに先立って雑誌『アナル』をはじめフランス近世史に関する文献を講読した上で執筆すべきであったと感じているが、評者の語学能力の欠如のためそれを果たすことは叶わなかった。この点を深くお詫びするとともに、そのこと等起因する本論文集の内容に関する曲解があったならば、執筆者の方々に対して切に寛恕を請う次第である。

- (1) (山川出版社、二〇〇九年)。
- (2) (山川出版社、二〇一一年)。
- (3) (山川出版社、二〇一一年)。
- (4) その代表的成果として、ここでは、鶴川馨・ジェイムス・L・マックレイン・ジョン・M・メリマン編『江戸とパリ』(岩田書院、一九九五年)を挙げておきたい。
- (5) 前掲『別冊都市史研究 パリと江戸 伝統都市の比較史へ』五頁以下。
- (6) 本論文集、六頁以下、参照。
- (7) 本論文集、一〇五頁、一二九頁(吉田伸之氏の応答)参照。
- (8) 前掲『江戸とパリ』三頁参照。
- (9) 同右、二一章。

- (10) 本論文集、一〇二頁、一二七頁(吉田伸之氏の応答)参照。
- (11) たとえば、その代表的な成果として、ここでは畑中敏之『身分を越える―差別・アイデンティティの歴史的研究』(阿吡社、二〇一四年)、横田冬彦「近世の身分制」『岩波講座 日本歴史』一〇、近世一(岩波書店、二〇一四年)等を挙げておきたい。

- (12) 本論文集、九六頁参照。
- (13) 同右、三一頁以下。
- (14) 同右、四八頁。

(坂本 忠久)

堅田剛著『明治憲法の起草過程―グナイストからロエス

ラーへ』(御茶の水書房、二〇一四年)

一 本書の構成

ベルリンの壁の崩壊の一〇〇年前、フランス革命勃発の一〇〇年後、明治二二(一八八九)年は、非欧米国である日本ではじめて近代的意味の成文憲法、すなわち大日本帝国憲法(以下では、本書にならって明治憲法とする)が發布された年である。本書は、その明治二二(一八八九)年を問題にするのではなく、そこに至る過程についての研究、とりわけ吉野作造、鈴木安蔵とその両者の間に入る明治文化研究会での明治憲法の制定過程をめぐる研究を中心に、明治憲法制定に影響を与えたドイツ人、特に吉野がその研究の中心においたグナイスト、鈴木およびヨハネス・ジーマスが研究の中心においたロエスラーについて取り上げて、彼らの功績とその影